

〈実践報告〉

淑徳大学地域創生学部における 「読み書き」教育の実践について

中 島 正 博

要 旨

本稿では、2023年に開設された淑徳大学地域創生学部における「読み書き」を重視する教育実践の背景とその内容について、筆者自身の教育上の経験もふまえて述べた。これは、文章を書けないとは「筋道の通ったひとまとまりの文章」を書くことができないこととして捉え、それは、「文章を論理的に組み立てていく技法や説得力のある文章に必要な『型』の習得」によって改善可能であるという考えに基づいている。具体的には、5段落構成法、係り結びの法則（たとえば、〇〇はなぜか」という設問には、「××だから」という「理由」を回答とする）、事実と意見を書き分けること、などの作法を教授した。まだ1年目であり、十分な効果測定には至っていないが、今後も「読み書き」教育を軸とする教育に取り組んでいくことが必要である。

キーワード 大学生の読み書き、5段落構成法、「係り結び」、「接続詞」、
事実と意見を書き分ける

はじめに

本稿では、2023年に開設された淑徳大学地域創生学部における「読み書き」を重視する教育実践の背景とその内容について、筆者自身の教育上の経験もふまえて述べる。

「読み書き」教育が必要とされる背景

さいきんの学生・生徒は文章を書けない、という声は多い。しかし、では、「どのような生徒を指して『書けない』というのか。『書けない』原因はどこにあるのか。いつの時点と比較して『増えている』というのか¹」という学問的な問いに対する答は、そう明確ではない。

田中自身は、2005年の国立教育政策研究所による「特定の課題に関する調査(国語)」（小学校4年生から中学校3年生までの児童生徒を対象に実施）をもとに、文章を書けないとは、論の運び方の一貫性が弱く、「筋道の通ったひとまとまりの文章」を書くことができないこと

なかじま まさひろ：淑徳大学 地域創生学部

と定義し(5ページ)、それは「書くことを苦手とする生徒は、書こうとする内容が定まらな
いままに書き出してしまい、あとは思いつくままに言葉を続けてしまう(7ページ)」からで
はないかと分析している。

藤木【2011】は、文章を書けないことを小学校以来の作文教育から振り返り、「小学校の
作文指導では、書くための技術ではなく、ものを書く児童の姿勢と、それを心情的に支援す
る教師の態度に重点が置かれているのである。そして、小学校以降の作文指導は教育カリキ
ュラムには存在しない」と述べたうえで、「こうした現状に一石を投じようとしたのが、1990
年代以降の大学入試で採用された小論文試験である」が、「高校教育のカリキュラムには存在
しない科目を『現場を無視したまま普及』する結果となったことは否めない。こうして、試
験に採り上げられそうなテーマや論点にばかり受験生や入試関係者の関心が向かい、文章を
論理的に組み立てていく技法や説得力のある文章に必要な『型』の習得が後回しになるとい
う皮肉な事態が生じた²」と批判している。

本稿は、文章を書けないとは「筋道の通ったひとまとまりの文章」を書くことができない
ことであり、それは、「文章を論理的に組み立てていく技法や説得力のある文章に必要な『型』
の習得」によって改善可能であるという考えに基づき、淑徳大学地域創生学部において「文
章を論理的に組み立てていく技法や説得力のある文章に必要な『型』の習得」をめざす取り
組みについて、述べるものである。

なお、「読み書き」教育の効果としては、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていく
ために必要な基礎的な力」といわれる社会人基礎力³ともいべき能力獲得にとどまらず、と
りわけ地域創生人材の基礎的な力の獲得につながることが予想される。地方自治体や経済団体
ほかで住民や関係者とともに働く場合、「企画力」そのものとともに「企画をどう伝えるかの
力」が求められるからである。

「読み書き」教育についての筆者の経験から

筆者の在籍していた和歌山大学経済学部では、高等教育改革の中で、教育改革プロジェクト
に取り組んでいた⁴。1年生に「基礎演習Ⅰ」という少人数の演習科目を配置し、話すこと、
傾聴することとともに、「読み書き」のトレーニングを実施していた⁵。

レポート等においては5段落構成法⁶を徹底することを重視していた。5段落構成法とは、
まず、「とりあげるトピックや位置づけ」を書き、理由や分類等を3つに分け、最後の段落
でまとめをするという文章表現の構成方法である。書く能力不足については、おそらく、「な
にを書いていいかわからない」「どう書いていいかわからない」ことが予想されるために、「型」
を示して書き慣れさせればよいのではないか、という仮説にもとづいていたものと思われる。
筆者も、学生の多くはレポートの「書き出し」に悩んでいることを感じるが多かった。
そこで、第一段落では「このレポートでは〇〇について、3つの理由に分けて書く」とし、
第2から第4段落で3つの理由を述べるようにすれば書きやすい、という指導をしたが、そ
れは多くの学生に受け入れられていた。

また、1年生後期の授業(基礎演習Ⅱ)では、新書の書評を書くことになっている。ところ

が、多くの学生は、新書のみならず書籍を読んだ経験に乏しく、「読書感想文」はあっても書評を書いた経験もほとんどない。そこで、筆者は、書評の「型」として、後述する東京外国語大学・高橋名誉教授の書評のひな型を参照して作成し、この型にあわせて書くように指導した。

淑徳大学における「読み書き」教育の実践

① 新入生セミナーにおける講義

筆者は、2023年4月5日開催された「初年次セミナー」において、90分の1コマを使い、「淑徳大学地域創生学部の『レポートの書き方』」と題する講義を行った。これは、初年次教育テキスト編集委員会【2009】を底本としたもので、その「第Ⅲ部レポート・論文を書く」を解説したものである（以下の文中のページ数は、当該書籍のページ数である）。

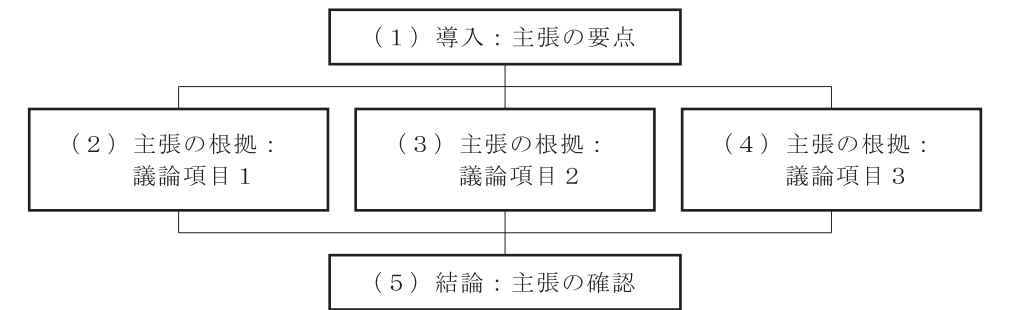
レポートの書き方の前段として、書くとは「自分の伝えたいなにごとかを、文字をつかって、誰かに伝えること」（72ページ）であることから説明をはじめた。

すなわち、①確かめることができる客観的事実に基づき、②自分の言いたいことである意見の主張を行い、③最終的に、読み手を説得・納得させることがレポートの目的であることを強調した。③については、教科書や教員の意見を写したからといって説得・納得するとは限らないことと、説得的であれば教科書や教員の意見と異なっていてもOKであるのが大学でのレポートであると補足した。

続いて、講義の本論としては、レポートのルールとしての5段落構成法、テクニックとして「接続詞」に慣れること、事実と意見を書き分けることの3点を強調した。

まず、レポートのルールとして、序論（全体の1～2割）、本論（全体の7～8割）、結論（全体の1割）の構成にすることを説明し、その「型」として、5段落構成法を解説した。

5段落構成法にもとづけば、第1段落は学術論文の「はじめに」、続く3つの段落をつかった本論、第5段落は「おわりに」にあたる。レポートにまとめるにあたっては、たとえば、第1段落は「このレポートは三芳町の人口動態について述べる」、第5段落は「これまで述べてきたように、三芳町の人口動態について、〇〇〇であることがわかった」とするのが書きやすいだろうと解説した。本文の2～4段落については、理由であったり（たとえば、理由



出所：菊田ら【2006】95ページ。

図1 5段落構成法の概要

は3つある。第一に〇〇、第二に〇〇、第三に〇〇)、分類であつたり(たとえば、ウクライナ戦争の賛否を国別にみると、ロシアの味方、ウクライナの味方、中立の3つに分類できる)、時系列であつたり(たとえば、まず信長が、次に秀吉が、最後に家康が日本を統一した)のように整理ができると、具体例をもって示した。

また、レポートのテクニックとして2点を紹介した。一つは、「係り結びの法則」と筆者が名づけたもので、「理由を述べよ」という設問であれば、理由という「係り」に対応する「結び」は「〇〇だから」「理由は〇〇だ」という体裁を意識することである。この時、たとえば、少子化の原因は何か、という設問に対して、「所得が少なくなった」という現象をあげるレポートが多いのだが、これを「所得が少なくなったから」と文章を修正するだけにとどめず、「所得が少なくなった」らなぜ少子化になるのかの因果関係を考えて書くことで、論理展開が明瞭になっていくことにつながる。

2つめは、「接続詞」についてで、たとえば、『しかし』に続く後の文で、『自分の意見』を述べるのが一般的です(96ページ)と記述されている箇所を引用し、たとえば、「歴史は好きだ。しかし、試験の点数は悪かった」という会話に続いて「へえ、歴史好きなんだ。何時代が好き?」と聞いてしまう日常会話をよく耳にするが、大切なのは「しかし」に続く「試験の点数は悪かった」とであると、具体例をあげて説明した。

また、第5段落は「これまで述べてきたように」で書き始めればよいと説明した。「これまで述べてきたように」「以上まとめると」など、これから結論を述べる際に使われる「接続詞」の用法に慣れるように述べた。

レポートについて強調したことの3つめは、「事実と意見を書き分ける(98ページ)」ことについてである。以下の例をあげて説明した。

「今日の気温は25度で、暑いなあ」という例文についてみると、「気温が25度」であることは事実であり、「暑いなあ」は意見であることを述べた。そのうえで、「今日の気温は25度で、昨日より暑いなあ」という例文になると、昨日の気温が25度以下であるなら「昨日より暑い」ということも事実であつて、意見ではないことに注目させた。レポートとは意見を書くことであるから、「今日の気温は25度で、昨日より暑いなあ」というのはレポートの体裁としては不十分であることを強調した。

事実と意見を書き分けることに関連して、レポートを書くということは「自分の伝えたいなにごとか」を書くことであるので、主語は「自分」であることを説明した。「私はこう思う」などと書く必要はないこととともに、他人の意見を述べるときは、「〇〇さんは、『××××』と述べている」と、〇〇さんという主語と書くとともに、カギカッコ(「」)を使うと区別できると述べた。このとき、読んだ人が確かめやすいように、「〇〇の本の××ページ」やインターネットのURLを書くように注意した。出典を明確にすることで剽窃にはあたらないとともに、意見と事実、自分の意見と他人に意見を区別して伝えることができるのである。

② 入学前教育

淑徳大学地域創生学部では、他の私立大学と同様に入試が多様化しており、半数以上の受験生が総合選抜型入試や高校推薦方式などで年内に合格が決まっている。他大学・他学部においてと同様、合格者に対して、いくつかの入学前教育の課題を課している。そのひとつに課題図書があげられる。

2023年度入学者に対しては、教員から書籍リストを提示し、3点をめどに、①本のタイトル、②本の概要、③本から学んだことを書かせる「ミニレポート」を提出させた。2024年度入学者からは、これを以下のように改善した。第一に、書籍リストを新書等に限定したこと（研究書等では複数の章を指定することは許容した）。第二に、「ミニレポート」の形式を改め、「ミニ書評」とした。そのひな型は以下である。

① ミニ書評のタイトルと、あなたの氏名

タイトルの例：×『○○（本のタイトル）』を読んで。

○『○○（本のタイトル）』を読んで、□□□が理解できた。

② 著者の問題意識（問い）は何か

＝著者は何を明らかにするためにその本を書いたのか。

＝著者はなぜそのような問題意識を持ったのか（研究・執筆の動機は何か）。

③ 著者はどのような結論（問いに対する答え）を出しているのか。

＝著者の言いたかったことは何か。

④ その他

例1：○○を読んで、◇◇についてさらに調べてみたいと思った。

例2：◇◇について勉強しなかったのに、こんな点が期待外れだった。

⑤ 本のデータ（著者、タイトル、出版社、発行年）

「ミニ書評」は、大学生としての読書の基本として「論理的な文章」を読むこととともに「批判的に読む⁷」経験をさせることを目的とした。これは、新書を読ませ、第一段落（選んだ理由）、第二段落（新書の概要）、第三段落（引用箇所）、第四段落（新書の価値の説明）という枠組みで読書レポートを書かせる実践⁸を参考とし、「ミニ書評の書き方」のひな型については、東京外国語大学の高橋正明名誉教授のホームページ⁹を参照に作成した（筆者自身の和歌山大学経済学部基礎演習Ⅱで用いた書評のひな型をバージョンアップした）。なお、新書を読ませることが目的であるので、文字数は500字程度と短めに設定している。

おわりに—今後に向けて

以上述べたような「読み書き」教育は初年度であり、効果測定にまで至っていないが、感覚的には、学生の「読み書き」能力の向上につながっているように思われる。

今後、「読み書き」能力の向上に関しては、まず、「読み」について、学部のルーブリックでは、「資料調査」能力のキャップストーンとして定められている「資料を集め、情報を整理し、自らの研究やプロジェクトの目的や課題を明確にできるとともに、資料の分析を通じて

地域課題の原因や背景を明確にできる」ことを目指し、第一に、(自分や教科書的なものとは異なる)意見を正しく要約できること(さらには、意見の異なる論者の論点を、たとえば比較表を作成して、対照できること)、第二に、他者の意見を疑い、その正否を判断できること、などにむけた指導のレベルアップが求められる。

加えて、「書く」ことの習熟としては、「書く」機会を増やすとともに、「ライティングラボ」の設置¹⁰も考えられる。これについては、他大学における先行事例を検討するほか、予算や人員配置、開設場所、他学部との調整など、さまざまな課題がある。

いずれにしても、「読み書き」教育を軸として、日本語によるコミュニケーション能力を身につけ、社会人基礎力ともいわれる能力を獲得させるとともに、地域創生学部における地域創生人材育成のための教育に取り組んでいくことが必要である。

【注】

- 1 田中宏幸「書けない原因の究明と課題解決の方策」明治書院【2019】所収、4ページ。以下の引用におけるページ数は同論文のページ数である。
- 2 藤木【2011】110ページ。藤木は、説明・説得のための実用志向の作文指導が系統的に行われているアメリカの作文教育を先行研究をもとに簡単に説明している。
- 3 経済産業省ホームページ <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> 参照(2024年2月25日閲覧)。
- 4 大澤【2011】参照。筆者の入職した2012年には1年生前期は、コミュニケーション能力(聴く、話す)を重視する基礎演習Ⅰ、後期は、新書を輪読し最終的には書評を書く基礎演習Ⅱという体系で実施されていた。なお、筆者自身は、基礎演習Ⅰでは、新聞の読者からの投稿のコーナーの見出しは6字2行であった形式を真似て、見出しやタイトルのつけ方を演習したり、童話・桃太郎を5段落構成法で要約したりする実践を行った。
- 5 2017年度以降、2年生に「発展演習」という演習科目が配置され、3年生から始まるゼミの準備過程として少人数で議論・調査を行う学習経験を積むことで、社会科学的な知識に関する論理的思考力、批判的思考力を高めることを目指した。
- 6 5段落構成法については、菊田・北林【2006】92～140ページに詳しい。同書は、和歌山大学経済学部での基礎演習Ⅰにおける教科書である。
- 7 入学予定者への配付資料では、『『批判的に読む』とは、反論することではありません。筆者の主張を正確に理解したうえで『その通りだ』と納得することも『批判的に読む』ことです』という注釈を加えている。
- 8 立和名猛「高等学校における『書くこと』の実践と指導の工夫」明治書院【2019】所収、64ページ。
- 9 <http://www.tufs.ac.jp/ts/society/masaaki/nyumon/kakikata.htm> (2023年8月30日閲覧。なお、ご本人のご逝去にともない、校正時の2024年2月25日現在 該当ページは削除されている。)
- 10 金沢工業大学のライティングセンターの事例については、藤島ら【2003】や、同所のホームページを参照。

【参考文献】

- 大澤健【2011】「大学における「読み書き」教育の改善に向けてー教育改善プロジェクト 2010 の目的と概要ー」和歌山大学経済学会『研究年報』第 15 号.
- 菊田千春・北林利治【2006】『大学生のための論理的に書き，プレゼンする技術』東洋経済新報社.
- 初年次教育テキスト編集委員会【2009】『フレッシュマンセミナーテキスト第 2 版』東京電機大学出版局.
- 藤木剛康【2011】「日本の作文教育の問題点とライティング・センターー和歌山大学経済学部の文章作成指導はいかにあるべきかー」和歌山大学経済学会『研究年報』第 15 号.
- 藤島秀隆・吉川美春・石川倫子【2003】「K.I.T. ライティングセンターの活動と現状報告」金沢工業大学『工学教育研究』第 9 巻.
- 明治書院【2019】『日本語学』2019 年 3 月号，特集「書けない」生徒が増えている.